

“帰ってくるタンゴ、ふたたび”

峰 万里恵(うた) 齋藤 徹(コントラバス) 高場 将美(ギター)

“Otra vez... Tangos que vuelven”

Marie Mine (voz) – Tetsu Saitoh (contrabajo) – Masami Takaba (guitarra)

第 I 部

1. スール (南) *Sur*

詞：オメーロ・マンシ 曲：アニーバル・トロイロ

詩人マンシはアルゼンチン北東部のサンティアゴ州生まれですが、7歳のとき(1914年)ブエノスアイレス市の南部に引っ越してきました。道づたいに長い土塀があり、突き当りの土手の向こうは鉄道線路——彼が小学生のときから通った道です。この曲は、まず歌詞が書かれ、バンドネオン奏者で楽団リーダーのトロイロが作曲しました。第1部は歌詞に合わせて作曲。「スール……」とうたわれる第2部は、トロイロのイメージでメロディを作り、それに合わせて歌詞を書き直したのだそうです(1948年)。

大草原と都会のはざま……時代とともに消えゆく風景をうたったこの曲は、時がたつほど評価が高まり、近年では、スール(南)ということばが、タンゴの原風景のシンボル、キーワードとして使われるようになりました。

☆

古いあの街角と、いちめんの空。ポンページャ地区、あの土手に近づけば、恋人のきみの長い髪が思い出のなかに。そしてきみの名前は、さようならのことばの上に浮かんでいる。あの鍛冶屋があった街角、泥と草原、きみの家ときみの歩道とあの掘割り。雑草とアルファルファ(牧草)の薫

りが、いまふたたび、わたしの心を満たす……。

古いあの街角——なくなってしまった空。ポンページャ地区、もっと先は水びたし。愛情でふるえていた、きみの20年、あのときわたしが盗んだキスの下で。過ぎていったことどものノスタルジー、人生がいっしょに運んで行ってしまった砂、変わってしまった街に染みついたくるしみ、そして死んだ夢のながさ……。

南……土塀とその先は……南……酒場の明かりひとつ。もう決してきみには見えないだろう、ショーウィンドーにもたれかかって、きみを待っているわたしの姿が。もう決してわたしは星たちで照らすことはないだろう、ポンページャの夜また夜、仲むつまじいわたしたちの歩みを。

場末の路たちと月たち、そしてわたしの愛ときみの窓——すべては死んでしまった。わたしにはよくわかっている。

2. わが全人生 *Toda mi vida*

詞：ホセ・マリーア・コントゥールシ 曲：アニーバル・トロイロ

長い歴史をもったトロイロ楽団の、ごく早い時期のヒット曲です(1941年)。ダンス・ファンを喜ばせるリズムの魅力と、感傷的なメロディの両方をアピールして成功しました。作詞者は、自分自身の愛の葛藤(妻子がありながらかなり年下の美少女に恋してしまった)にインスピレーションを受けて(笑)、劇的な悲恋の歌詞をたくさん書きました。そのほとんどすべてがヒットしています!

☆

あなたに会えず、話もできない長い時がたったきょう、わたしはもう疲れきってしまった——あなたを探して、いつもいつも!

わたしは感じる、あなたに忘れられて、わたしがゆっくりと死んでゆくのを。そして思う、わた

しの冷たいひたいに、あなたはキスを置いてくれないだろうと。

わたしは知っている、あなたがたくさんわたしを愛してきたことを——わたしとおなじように、たくさん。でもそのかわりに、わたしはたくさん悩んできた——あんたよりずっとたくさん!

わたしは知らない、なぜあなたを失ったのか、それいつのことだったか? でもわたしは、あなたのそばに、わたしの全人生を置いてきた。

そしてきょう、あなたがわたしから遠くにいるとき、そしてあなたが、わたしを忘れることができたとき、わたしはあなたの人生のひとつの通過点、ただそれだけ!……

3. パリに錨 (いかり) をおろして *Anclao en París*

詞：エンリーケ・カディーカモ

曲：ギジェルモ・バルビエーリ

1920～30年代のヨーロッパのタンゴ・ブーム！ これを利用して、パリに行けばなにか素晴らしい幸運がつかめるのではないかと、ちょっとタンゴが踊れるアルゼンチンの若いボヘミアンたちが片道切符で大西洋を渡っていきました。世の中はそううまくいきませんね。成功は来ず、帰る旅費もかせげません。

この歌詞は、そんな夢破れた青年たちをたくさん見た詩人カディーカモが、スペインのバルセローナのカフェにいたとき思いついて、一気に書き上げました。自分でも見事にできたと自信をもって、そのときパリにいた親友の（もちろん放浪していません、公演中でした）歌手カルロス・ガルデルに送りました。ガルデルもこの歌詞に感動し、伴奏ギタリストのバルビエーリに曲をつけてもらって、すぐ歌いました。作詞・作曲ともに、ブエノスアイレス人間の味が濃厚で、タンゴ歌曲の隠れた大傑作です。

☆

さすらいのボヘミアン人生に引きずられてきて、わたしはパリに錨 (いかり) をおろしてしまった。も

う、身動きが取れない。不運に包まれ、困窮に囲まれ、わたしはこの遠い国からブエノスアイレスを思っている。大通りに面した窓から、わたしはやわらかく降ってくる雪を見つめている。死んでゆくようなトーンの赤い灯たちは、妖しいまなざしの瞳のようだ。

だれかが話してくれた、ブエノスアイレスよ、おまえは花を咲かせているそうだね。中心に斜めの通りが一組できたとか——どれほど、おまえを見たいことだろう。ここで金もなく、信じる心もなくし、座礁しているわたし。

遠いブエノスアイレス、おまえはどんなにすてきなことだろう！ わたしは船出してからもう10年。このセンチメンタルな街モンマルトルで、わたしは感じる。思い出がわたしにナイフを刺し込むのを。

4. ペーナ・ムラータ (混血女の悩み) *Pena mulata*

詞：オメーロ・マンシ

曲：セバ스티アン・ピアーナ

ムラータは黒人の血がまざった女性のことです。19世紀にはブエノスアイレスにもかなりアフリカ系の人々が住んでいたようですが、冬が寒すぎるのでうまく適合できず、他の地方あるいは国へ移って行ってしまいました。この曲は、昔の黒人の祭りのリズム《カンドンベ》を模した創作です。作曲者ピアーナは、ピアニストで、昔のブエノスアイレス民俗音楽の研究者でもありました。歌詞は、元来はルンバ用に書いたものらしいです。同じひびきが繰り返され、さすが詩人は言葉の魔術師ですね。音のおもしろさを前面に出した歌詞ですが、意味もちゃんとしています。

☆

混血の黒い悩みがほつれてゆく、刺繍織りのロ

ーブの下。ミロンガの痛みが、ほんの少し悲しい秋の夜を長くする。

霧のかかった古い鏡のように輝いている、踊る男の頭。待ち伏せるうらみ。絶望の絵筆が彼女の胸に描いた真紅のしみ。

おまえの母は、愛に巻き込まれて死んだ——白い魂と石炭の肌。彼女が去ってゆく道を開いたのは、とある牛追い男のナイフ。

おまえの父は影に巻き込まれて死んだ、その裏切りに復讐するために。ムラータ、おまえの星が生まれた、クレープ織りの喪服を着た空の下。

5. アルフォンシーナと海 *Alfonsina y el mar*

詞：フェリークス・ルーナ

曲：アリエール・ラミーレス

アルゼンチンの女性詩人アルフォンシーナ・ストルニ (1892-1938) は、保守的な社会に挑戦する女性でした。後期の作品は、その時代には類のない大胆な官能的な欲望を訴えています。多くの批判を受け、傷つくことが彼女の愛の歌声をより力強くしたのだといわれます。しかし、孤独と乳がんにくるしみ、新聞に「わたしは眠りましょう」という詩を送って、その翌日、マルデルプラタの海岸から海に入って行って死にました（かつて、すべて海をうたった詩集を出したことがあります）。この曲は、彼女の最後の詩（海は出てきませんが）を土台にして、フォルクローレのサンバのリズムで展開したものです。

☆

海がなめる白い砂を通過して、彼女の小さな足跡

はもう帰ってこない。もの言わぬ悩みのただ1本の小道が、海の泡にたどりつく。

「ランプの明かりを少し落としてください。わたしを安らかに眠らせてください。もし彼が呼びにきたら、わたしがいると言わないで。アルフォンシーナは帰ってこないと言ってください」

あなたは去ってゆく、アルフォンシーナ、あなたの孤独といっしょに。あなたは、どんな新しい詩を探しに行ったのか？ 風と塩の古い声が、あなたの魂をくだけ、あなたを呼んでいる。そしてあなたは行く。夢の中にいるように、眠りこんでいるアルフォンシーナ、海の衣をまとって……。

6. ベーテ・デ・ミ (わたしから去って) *Vete de mí*

詞：オメーロ・エスポーシト 曲：ビルヒーリオ・エスポーシト

1940年代の新感覚タンゴ歌曲を代表する詩人と作曲家（ピアニスト）の兄弟の作品です。ただしタンゴではなくボレーロのリズムで、キューバのピアノ弾き語りアーティスト、ボラ・デ・ニエベの涙ながらの熱唱で大ヒット。ラテンアメリカ全体で、たくさんの歌手がとりあげました。近年では、ブラジルのカエターノ・ヴェローゾがリヴァイヴァルさせたのをきっかけに、各国で再発見(?)されている感じです。アルゼンチンの若手タンゴ・ミュージシャンはカエターノを通じてこの曲の存在を知った?

☆

すべてを喜びと若さで満たすあなた、光の向こうの月の中に亡霊を見ているあなた、青の薫りをもった歌声を聞くあなた、わたしから去ってください。

老いたバラの木の枝たちが、花を咲かせず枯れてゆくのを、立ち止まって見てはいけない。愛の風景に目をやってください。それが夢見るための理由、そして愛するための理由。

不幸のすべてと闘ってきたわたしは、にぎりしめすぎて両手が砕けてしまった。この手ではあなたをつかまえられる。わたしから去って。

わたしは、あなたの人生の過去の霧の中で、そのいちばん美しいものになれるだろう、あなたがわたしを忘れることができたときには。

いちばん美しい——わたしたちが思い出すことができないあの詩が、いちばん美しいように……。

7. コントラバスのソロ *Solo de contrabajo*

齋藤徹のコントラバスをお聴きください。何を弾くか、本人もそのときまで決めていません。ちなみに、徹さんのコントラバス本体と弓は、ちょうどタンゴがこの世に登場したころの楽器です(1877年、Gand & Bernardel 製作)。作者たちはフランス人でヴァイオリンが有名、コントラバスは稀少だそうです。

第II部

1. 下町のロマンス *Romance de barrio*

詞：オメーロ・マンシ 曲：アニーバル・トロイロ

きょう最初にお聴きいただいた「スール(南)」の作者コンビによる、その少し前につくられたワルツです。これはメロディがぜんぶ先に作られ、そこに歌詞を乗せたのだと思われます。ワルツ(スペイン語ではバルス)は、つねにタンゴ楽団のレパートリーに不可欠のものでした。

☆

最初は遠い秋の日のデート、きみのバルコニー、きみの古い庭。その後は、熱病の鼓動をもった手紙。「ノー」と嘘をつき、「シー(はい)」と誓って。

きょうきみは、たぶんわたしを軽蔑しながら生

きているだろう。わたしが忘れることができないで嘆いているのを夢にも知らず。失意がきみを、わたしと同じように盲目にした。忘れないで生きてゆくことよりも、すべてをこぼんで去っていることのほうが、ずっとやさしい。

下町のロマンス、きみの愛とわたしの愛。はじめは恋心、後には痛み。わたしたちが決して犯さなかったさまさまの罪ゆえに、わたしたちふたりが苦しめられなければならなかったさまさまの罪ゆえに。

2. ボルベール (帰郷) *Volver*

詞：アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル

作曲家カルロス・ガルデル（1935年に飛行機事故で没）はタンゴ歌手の最高峰です。この曲は彼の主演映画（1934年）『想いのとどく日』の挿入歌のとしてつくられました。作詞者レペーラは脚本家です。

この映画の中でもガルデルは歌手で、長く外国で活躍して、中年になって故郷ブエノスアイレスへ帰る船上で、この曲がうたわれます。

フラメンコの歌手チャノ・ロバートさん（現在80歳）は、子どものころこの映画を見て感激し、何度も映画館に通ってこの曲を覚えました。そして、ここ20年ぐらいは、ソロ・ステージの最後にいつも、うたってきました（フラメンコのスタイルで）。そのおかげでスペインでは、ガルデルを知らない世代にも、かなり有名な曲になっています。最近、ペドロ・アルモバル監督が映画に「ボルベール（帰郷）」とタイトルを付け、この曲を挿入歌として、使いました。彼がこの曲と最初にめぐり合ったのは、ガルデルを通じてか、チャノさんを通じてか、わかりませんね。

☆

わたしには見える気がする、遠くでわたしの帰り道を教えてくれている光のまたたきが。そのおなじ光がかつては、深い痛みの時間を青白く照ら

していたのだ。

人はそう望まないのに、最初の愛に帰ってゆくもの。あの古い通りで、いつか、こだまが言った「あのひとの命はおまえのもの、あのひとの愛はおまえのもの」 そのとき、あざけるように見下ろしていた星たちが、今日は冷ややかに、帰ってゆくわたしを見ている。

わたしはこわい、わたしの人生と対決しようとして帰ってくる過去と出会うのが。わたしはこわい、数々の思い出の鎖でわたしの夢を縛りつける夜が。でも逃げてゆく旅人は、遅かれ早かれ、歩みを止める。そしてすべてを破壊する忘却が、わたしの夢を殺してしまったとしても、わたしはとても小さな希望を隠し持っている。——それが、わたしの心の全財産。

帰ってゆく……「時」の雪で銀色に染まったこめかみ。感じる……人生は風のひと吹きだと、20年は「無」にすぎないと。生きてゆく……魂は甘い思い出にしがみついたまま。その思い出に、ふたたびわたしは泣く。

3. 場末のメロディ *Melodía de arrabal*

詞：マリオ・バティステッラ / アルフレード・レペーラ 曲：カルロス・ガルデル

1930年代初めに、パリでつくられたガルデル主演映画の同名主題歌です。メロディ作者は、ガルデルの名前になっていますが、彼の発声の先生だったエドゥアルド・ボネッシ（いっしょの船でパリに来た）がつくってプレゼントしたものです。ガルデルは原作の細部を変えて、うたいやすく直しています。

作詞者のバティステッラは国際的なボヘミアン文学青年で、当時パリにいて、無声映画の字幕をスペイン語に翻訳する仕事をしていました。その後は数々のすてきなタンゴの歌詞を書いています。パリで青春していた下宿部屋をうたった「青い小部屋」が、とくに有名な曲です。もうひとり作詞者としてクレジットされているレペーラは、映画の脚本を担当しましたが、この曲に関してはほとんど実際の仕事はしていないと思われます。

☆

月光で銀色に染められた街、ダンスパーティのざわめきが、その全財産。うすぐらい路地で、つぶやいているバンドネオン。いっぼうでは、花のように

きれいな女の子が、コケティッシュに待っている、しずかな街灯の光の下で。

荒くれ者と歌手たちのゆりかご。言い争いと決闘、わたしの愛のすべてのゆりかご。場末の街よ、おまえの壁に、わたしはナイフで、愛している名前を彫った——この街を出て行ってキャバレーの女になったローサ、金髪のマルゴ、最初のデートでわたしに愛をくれた、あばずれのリータ……。

街よ、おまえは、センチメンタルな雀の、おちつかない魂をもっている。悩み……祈り……やくざな街のすべてが場末のメロディだ。

古い街よ、おまえを思い起こすとき、わたしの目から大きな涙がこぼれるのを許しておくれ。涙は石畳に転がってゆき、おまえに長いキスをする。わたしの心をおまえに与えるために。

4. 花咲くオレンジの木 *Naranja en flor*

詞：オメーロ・エスポーシト 曲：ビルヒーリオ・エスポーシト

第I部の「ベータ・デ・ミ（わたしから去って）」と同じ作者兄弟が、ほぼ同じころにつくったタンゴです。詩人の兄が20歳そこそこ、ピアニストの弟は16歳ぐらいでした。ふたりとも真の天才ですね。この兄弟の場合、まず歌詞ができて、そこに曲を付けるという創作過程です。作曲

家の弟は、ずっと後年のことですが自分でもピアノを弾きながらうたいましたし、兄の死後は、なかなかすごい歌詞も書きました。詩への感応力がすばらしい作曲家だったといえます。

この曲のはじめに「やわらかい水よりも、やわらかい」

という、わけのわからない表現がありますが、これは作者自身も意味がわかっていないのでご心配なく。意味を理解することは必要ではありません。なにか感じればいいのです。そして、その感じかたは、人によってちがっていいわけです。——また、この部分はLの音とRの音のひびきの対比や調和がとても美しいです。スペイン語の詩では（歌詞であっても）音のひびきそのものも魅力がないといけないのです。

☆

やわらかかった、やわらかい水よりも……。川よりもみずみずしかった。花ざかりのオレンジの木。そして、その夏の通り、失われた通りに、人生のひとかけらを残した。そして行ってしまった。あのひとに、わたしの両手は何をしたのか？

わたしの胸に、これほどの痛みを残すほどの何をしてしまったのか？……。老いた木立の痛み、街角の歌、人生のひとかけらとともに……。花ざかりのオレンジの木。

人は最初に、悩むことを知らなくてはいけない。その後、愛する、その後、別れてゆく、そして最後は考えもなく歩きまわること……。花ざかりのオレンジの薫り。ひとつの愛の、むなしいいくつかの約束、それらは風のなかに逃げていった……。その後——その後、何の意味がある？ わたしの全人生は「きのう」なのに。永遠につづく、老いた青春、それがわたしを、なにもできない弱者にしてしまった、光をなくした小鳥のように……。

5. 酔いどれたち *Los mareados*

詞：エンリーケ・カディーカモ

曲：フアン・カルロス・コピアーン

キャバレーを舞台にした大衆劇の主題歌（1922年）で、作曲家コピアーンは、エレガントなボヘミアン人生をおくったピアニストで、ロマンティック・タンゴの最高の作曲家のひとり。

タンゴ歌謡が量産されていた時代なので、この曲は埋もれてしまいました。しかし20年ほど後に、バンドネオン奏者で人気楽団リーダーのアニーバル・トロイロが偶然この曲のレコードを聴いて、メロディとハーモニーの美しさに感動し、作曲者（当時ニューヨークにいた）の親友カディーカモに新しい歌詞を書かせました。この再評価がきっかけで、今日のミュージシャンがもっとも演奏したがるタンゴのひとつになっています。

☆

妖しく……。まるで燃えているようだった……。きみは飲んでいて。そしてシャンパンのはじける音のなかで、狂おしく笑っていた、泣かないために。わたしはきみに出会ってしまったのが、つらかった。わたしには見えた、きみの両目に、電気の

ように熱く輝くもの——わたしが、あれほど愛していたきみの目に。

今夜、わたしの女友達よ、アルコールがわたしたちを酔わせた。かまうものか、人があざ笑っても、“酔いどれども”と呼ばれようとも。

いま、きみはわたしの過去に入ってゆく、わたしの人生の過去に。わたしの傷ついた魂が持ってゆく3つのもの——愛、悲しみ、痛み……。

いま、きみはわたしの過去に入る。そしていまわたしたちは、わたしたちの道をとろう。これまで、なんと大きかったわたしたちの愛！ でもそれなのに……。ああ……。残ったものを見てごらん。

だれにもそれぞれの悩みがある。わたしたちには、わたしたちの悩みがある。今夜、わたしたちは飲もう。なぜなら、もう二度とふたたび、会うことはないのだから。

6. エル・チョコロ *El choclo*

詞：エンリーケ・サントス・ディセーポロ

曲：アンヘル・ビジョルド

百年あまり前から今日まで、さまざまなスタイルのアレンジで演奏されつづけている、超名曲です。作曲家ビジョルドは、おもに即興歌で人気のあった芸人。この曲のタイトルは「トウモロコシ」のことで、彼の好物だったそうです。

タンゴ歌手で女優のリベルター・ラマルケが、メキシコで、ブニュエル監督の映画『グラン・カシーノ』に出演。そこでうたうために、作詞の大家ディセーポロが、新しい歌詞を書きました（1947年）。その後は歌の曲としても愛されています。

☆

人をからかうような、やくざっぽいこのタンゴとともに、タンゴが生まれ、暗い場末から空に向かって飛び立つ叫びとなった。愛の妖しい呪文がメロディとなり、希望だけを掬にして道を開いた。怒りと痛みと、信じる心と孤独のミックス——跳びはねる

リズムのなかで泣いている。

不思議なしらべの奇跡により、場末の女たちが生まれてきた。ぬかるみには月、腰には荒々しいリズム、そして愛するときには野性の激しい想い。

おまえは旗を立てて海に乗り出し、ペルノー酒のなかにパリとブエノスアイレスをミックスした。おまえの仲間にはヒモ、情婦、金持ち男と場末の女の子——スカートと、石油ランプと、ナイフのミサが、移民宿舎の中で燃えあがり、わたしの心で燃えた。

いとしいタンゴ、おまえを思いおこせば、ダンスのステップで中庭の敷石が揺れるのが感じられる。そしてわたしには聞こえる、わたしの過去がひとりごとを言っている声が——おまえの歌声に乗って。

7. ラ・クンパルシータ *La cumparsita*

詞：パスクアル・コントゥルシ 曲：G・H・マツ・ロドリゲス 補作：エンリーケ・マローニ

この曲には、多くの人に関係しています。①1916年、ウルグアイの首都モンテビデオ——マツ・ロドリゲス（当時19歳）がカーニバル行進曲として作曲。②プロのピアニスト、カルロス・ワーレンが、タンゴに直したピアノ楽譜を書く。③原作者の父親が出演するキャバレーに出演に来たアルゼンチンのピアニスト、ロベルト・フィルポ（当時タンゴの最高峰だった）の楽団が初演。曲があんまり単純なのでフィルポは、自作曲を流用した第3部を付け加える。さらに、第1部にヴェルディのオペラから借用した副旋律をつける。④1924年、ブエノスアイレス——ヴァラエティ劇場の台本作家などをしていたパスクアル・コントゥルシが、モンテビデオで聞き覚えたこの曲に歌詞をつける。第1部には、まったく別の新しいメロディもつけた（マローニは台本合作者）。カルロス・ガルデルのレコードで評判になる。*万里恵さんの歌はこのヴァージョンです*。⑥26年に、原作者が原曲のメロディそのままに作詞したが、その歌詞は人気がない。⑤1920年代末から、さまざまな楽団が新し

い編曲を競う。徹さんがソロで弾く変奏は、バンドネオン奏者ルイス・モレスコがつくったものを土台にしています。

☆

あなたにわかってもらえたら——まだわたしは魂のなかに、あの愛情をもちつづけていることを。

友だちはもう訪れてもこない。わたしをなぐさめてくれる人はだれもいない。わたしの命の人よ、あなたはわたしの哀れな心に何をしたのだ？

見捨てられたまじしい部屋には、もう朝の太陽も顔を窓からのぞかせない。わたしの仲間になってくれていたあの犬は、あなたが去ってからものを食べず、このあいだひとりぼっちのわたしを見て、やはりわたしから去っていった。

あなたにわかってもらえたら……。

わたしたちのタンゴに おいでくださって ありがとうございます。

またお会いできるのを 楽しみにしております。

“帰ってくるタンゴ、ふたたび”

2007年7月28日

アップリンク・ファクトリー

出演：

峰 万里恵（うた）

齋藤 徹（コントラバス）

高場 将美（ギター）

企画：倉持 政晴（アップリンク）／峰 万里恵

プログラム作成：高場 将美

今後ともよろしく願いいたします

☞ホームページ／ブログ☞

峰 万里恵 <http://mariemine.web.fc2.com>

齋藤 徹 <http://www.tetsu-saitoh.com> <http://blog.tetsu-saitoh.com>

アップリンク <http://www.uplink.co.jp>
